慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 笠井賢紀著 (協力 : 栗東歴史民俗博物館、龍谷大学コミュニティマネジメント実習)『栗東市の左義長からみる地域社会』サンライズ出版、2019年
Sub Title	
Author	武田, 俊輔(Takeda, Shunsuke)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.121- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

笠井賢紀著（協力：栗東歴史民俗博物館、龍谷大学コミュニティマネジメント実習）
『栗東市の左義長からみる地域社会』
サンライズ出版、2019 年

武田　俊輔

本書は、日本の地域社会において行われてきた小正月の民俗行事・左義長について、滋賀県栗東市におけるフィールド調査を通じて社会学的に論じたものである。と同時に、栗東市の博物館行政と大学との連携がもたらした成果であること、また地域づくりの実践や調査に力を入れてきた龍谷大学社会学部における学生たちの実習の成果が活かされていること、そして滋賀県内の伝統や文化について優れた書物を刊行することを使命とした地元出版社から刊行されているといった点に、本書の特徴が表れている。

まずは本書の内容について紹介したい。「第 1 章 左義長ことはじめ」では、小正月行事・予祝行事としての左義長の意味や担い手としての子どもの重要性について述べられる。続いて「第 2 章　昭和末期の民俗調査から」では、1988〜1995 年に刊行された町史『栗東の歴史』の刊行のために行われ、現在は栗東歴史民俗博物館に所蔵される民俗調査の調査票について紹介している。と共に、そこから見出される昭和末期の左義長について幾つかの事例をとりあげ、「左義長場はどこか」「竹や藁はどのように調達したか」「点火役は誰か」「左義長の後に何をするか」「左義長にはどんな意味があるか」といった、左義長を分析する上で重要になる視点を導出している。

第 3 章では昭和末期の調査から 30 年間の変化について見るべく、著者による生活史調査の内容が紹介されている。個人にとって左義長が持つ意味を読みときつつ、左義長におけるかつての子ども（男子）の役割や地区間の子ども同士の競い合い、資源の調達と配分などについて説明がなされる。その上で他の行事と違って左義長は子どもたちだけの社会が立ち現れるという点で特別なものであり、子どもにとっては左義長という行事を通じて「地域」としての意識が立ち現れることが論じられる。

第 4 章では 2 章・3 章のデータをふまえつつ、栗東歴史民俗博物館の協力によって行われた、栗東市内の全自治会に対するアンケート調査の内容と結果が説明される。①各自治会や左義長の実施状況等に関する基礎調査、②2018 年の左義長に関する調査、③過去の左義長からの変化に関する年表形式での調査、④左義長場の変化や左義長をめぐるエピソード、左義長の今後に関する調査という 4 種類の調査が行われている。その調査結果の解釈をふまえて、左義長を継続していくことが住民にとって正統性を持つような伝統的な「物語」が困難となっていると論じられる。なおこの章では各設問の意図や回答結果について詳細に説明さ

武田俊輔「笠井賢紀著（協力：栗東歴史民俗博物館、龍谷大学コミュニティマネジメント実習）『栗東市の左義長からみる地域社会』」『三田社会学』第 25 号（2020 年 11 月）121-124 頁

れているが、それは読者が同じような調査をする際に役立つことを意識して書かれている。

第 5 章では左義長が持ちうるさまざまな「物語」の可能性が検討される。伝統的な左義長の意味をめぐる「物語」が失効する一方、地域社会や子どもたちにとって地域と接触する社会化機会は不可欠であり、また子どもたち自身も左義長のような「子どもだけの社会」「非日常の経験」への憧れをもちうる。したがって左義長を今一度子どもたちの社会に取りもどすことができれば継続する可能性があり、現在の運営主体である自治会がそうした物語を軸に親たちを説得し理解を得ることが提案される。

「おわりに」では「なぜこの時代に、この左義長という行事が今も全国各地で行われ続けているのか」という問いに対し、「これまでも長く続いてきた行事であると人びとが信じており、かつ、左義長自体が、左義長を継続する基盤となるコミュニティの形成に貢献してきたからだ」という解答を示す。また博物館に残された過去の調査記録の二次分析や博物館と大学の連携の意義、自治会側の熱意や自治会自身による調査に向けた可能性についても触れられている。

次に本書の意義について考えてみたい。著者は「おわりに」で「民俗の調査が専門ではない私にとって、この分野での研究を進めることには若干のためらいもあ」ったことを率直に述べているが、そもそも社会学のなかで農村や都市の民俗行事を手がかりとした地域社会研究の蓄積は決して十分とはいえないのが現状である。とりわけ高度経済成長期における政府と資本による開発政策の進展とそれがもたらした地域社会の変動、そしてそれに対抗する地域主体としての住民運動の可能性という問題設定を中心とした、戦後日本の地域社会学の展開のなかでは、左義長のような民俗行事やその担い手への注目は、あくまでそうした地域住民組織の消失や再編といった消極的な意味付けにとどまるだろう（著者が本書で自身のテーマを地域社会学でなく、あまり聞き慣れない地域社会「論」としているのは、そのこととも関係があるように思われる）。有末賢はかつて「資本と行政、自治と自治体、運動と計画」といった「制度論的分析視角」に立つ主流の都市社会学・地域社会学に対して、自身の都市民俗研究を「地域住民の生活の場としての社会集団、社会関係、生活様式、民俗文化など」を問題にする「文化論的分析視角」として位置づけ、「近隣や町内社会、学区域、神社の氏子区域、同業者集団」等をとおしての生活地区・社会圏としての地域に焦点を当てようとした（有末 1999:49-52）。一般書としての性格を持つ本書ではこうした学史的な背景は明示されてはいないが、「なぜこの時代に、この左義長という行事が今も全国各地で行われ続けているのか」という著者の問いは、こうした主流の地域社会学において十分に引きつがれてこなかった可能性とも結びついている。

ただその一方で本書の内容は、タイトルに示されているような左義長から「地域社会」の構造について社会学的に分析したものというよりは、あくまで民俗行事としての左義長に関する研究に読めてしまう。本書の中に「地域社会」について解き明かすための手がかり自体はさまざまに含まれている。例えば昭和末期の民俗調査記録からは、かつて左義長を組むた

めの差配を行っていたのが耕作面積順の輪番制で決められていた「水入れ」という役割の人びとであったこと、また集落の年長者から6名が神社と惣堂の管理を担う「六人衆」として左義長に関わっていたことといった、左義長という神事や民俗行事を担う大人がどのような立場の者であったかが触れられている。さらにこの地域は旧東海道沿いで栄えた古くからの家系が連綿と続き、上下関係をともなうであろう本家・分家関係が現在まで意味を持つこと、そして著者が現在調査しているという講組織が連綿と続いていることなどは重要であろう。

より左義長に直接に結びついたところでいえば、柴・藁・藤・竹といった左義長だけでなく日常生活にも用いられた資源について、資源動員論やコモンズ論的な観点から論じられる必要がある。それらの資源を誰からどのように子どもたちは入手したのか、そうした資源を獲得する竹林や河川沿いの土地の所有・管理や利用権はどのように配分されていたのか、集落の中のどの家が特に子どもたちに篤志金を提供したのか。そうした資源が希少性を持つのであればその所有・管理とその提供はそれを担う家の威信と結びついていないのか。河川改修はそうした所有・管理状況にどのような影響を与え、あるいは与えなかったのか。隣接する集落同士の間でそうした土地から得られる資源をめぐる日常的な競合関係はあったのかどうか。

本書で描かれる「地域社会」は、年長の男子がリーダー格として年少の男子を指導しつつ行う子どもだけの愉しい非日常の時間としての左義長と、それを支える大人たちといった調和的なイメージにとどまるが、左義長をその一部として位置づけた人生をめぐるより長期的な語りの聞き取りと、民俗調査から見出される地域社会の構造とを関連させた分析をもう少し読みたかった。そのことは「左義長は今後も続けるべきだと思いますか」という質問に対して、なぜ説得性のある「物語」がもはやないにもかかわらず、8割近い回答者が「ともかく続けるべきだ」「一定の条件を満たせば続けるべきだ」と、続けること自体を目的とするような回答をしているのかについての、より説得力ある答えを導くことにもつながったのではないだろうか。

なお本書は各章の間に実習を受講した学生たちによるコラム、そして5章と「おわりに」の間には栗東歴史民俗博物館学芸員の中川敦之氏による解説が挟まれており、学生たちによる調査が地域社会において持ちうる可能性や、博物館に残された調査記録の意義や大学と博物館の連携の新たな可能性について触れられている。前任校（滋賀県立大学）で地域の博物館や教育委員会と連携しつつ、学生たちをまきこんだ祭礼調査とその成果の地元への還元を行ってきた評者としても（市川・武田編2012、武田編2016）、とても共感のできる内容であった。

「異文化」としての民俗行事や祭礼に接した学生たちが、単に調査にとどまらずそうした行事の手伝いにボランティアの形で積極的に参加する姿勢は住民との信頼関係をより深いも

のとしてきたし、そして彼（女）らの「なぜこんな行事を行っているのか」という素朴だが本質的な疑問は、しばしば住民自身による改めての問い直しを発生させる。そしてそのことによって、既にそのテーマについてある程度知悉していると住民が想定している教員のみの調査とは異なった結果をしばしば生み出しうる。評者自身の祭礼研究も（武田 2019）それに支えられてきた面は大きい。また博物館に残された調査記録の二次分析や、歴史・民俗などの分野の研究者との共同研究も有益な成果を生み出しうる。

したがってメディアとしての本書の意義を適切に位置づけるためには、単に学術的な評価だけでは十分ではない。むしろ本書が成立するに至るまでや成立後に創りあげてきた住民・行政・大学・著者の関係性や、本書がきっかけとなって生まれるそれらのアクター（間）の新たな実践の可能性といった側面が、この本をきっかけとして今後どのように発展していくかも含めて、この本の真価は問われる必要があるだろう。本書の刊行後に栗東歴史民俗博物館で開かれた「『栗東市の左義長からみる地域社会』刊行記念シンポジウム」に評者が出向いた際、地元住民が数多く参加し、著者に熱いエールを送っていたことが印象的であった。今後も著者はこの地域の調査を継続されると思われるが、そうした住民や博物館との関係性のなかで、さらにその地域社会論が発展し、住民自身がその成果を活用できることが期待される。著者と同様、滋賀を離れて後もそうした地域社会との関係性を継続していこうとする評者も、その歩みに学ぶべく注目していきたい。

【文献】

有末賢, 1999, 『現代大都市の重層的構造――都市化社会における伝統と変容』ミネルヴァ書房.

市川秀之・武田俊輔編、滋賀県立大学曳山まつり調査チーム,2012,『長浜曳山まつりの舞台裏――大学生が見た伝統行事の現在』サンライズ出版.

武田俊輔編、滋賀県立大学式年大祭調査団,2016,『世代をつなぐ竜王の祭り――苗村神社三十三年式年大祭』サンライズ出版.

武田俊輔, 2019,『コモンズとしての都市祭礼――長浜曳山祭の都市社会学』新曜社.

（たけだ　しゅんすけ　法政大学社会学部）